



子供たちの未来

——『新中間大衆の時代』を読む——

鬼 頭 宏

小学生のころ、長い長い夏の休みが近づくと、今年はどうなことをしてやるうかと胸をわくわくさせていろいろな計画を空想して楽しんだものでした。よそ目にうつるほどには気楽ではありませんが、それでも比較的自由に自分の時間を使える職をえて、今でも七月の声をきくとそわそわと、その昔作った、起床、朝食、勉強、あそび、昼寝……と、おそらく一度だって守ったことのない円い日課表を書いてみたりします。子供時代の夏休みは冒険の季節でした。アーサー・ランサムの世界は、私たちにだってありました。ある時は洞穴住まいの原始人であり、

ある時は樹上生活者であり、また大雨のあとには水溜りの大海原を渡る漂流者でした。適当な舞台装置とどうでもいいようなガラクタと、それにどうしても欠かせないのは想像力というスパイスでした。今年の夏、みなさんも冒険の旅に出てみませんか。それも未来への旅なのです。

はなしは深刻になります。未来に責任をもたなければならぬのはおとなですから、仕方ありません。いまの子供がおとなになる頃には、どのような生活が待っているのか、これを考えてみたいのです。目標は二十一世紀です。そしてこのタイム・トラベルの水先案内人には、村上泰亮著『新中間大衆の時代』（一九八四年、中央公論社刊）を頼みましょう。

見るからに堅苦しく、難しそうな題名ですね。事実、難しいのです。経済学の基礎をしっかりと勉強した学生でなければ、じゅうぶんに理解できない部分があります。経済学者ならば異論をさしはさみ、論争を挑みたくなる

箇所がいくつもあるはずですが。しかし私たちにとっては、著者が現在を文明史のうえでどのような地点に位置していると考えているのか、そして近い将来、文明はどのように変化していくと予測できるのかを知ることができれば、それで十分であろうと思います。

著者の文明観は本書の第八章「二十一世紀産業文明への展望」にわかりやすく述べられています。現代の世界が、日米欧の先進工業国のほかに発展途上地域も含めて、産業文明の時代にあることを誰も否定しないでしょ。それなら二十一世紀はどうか。十年ほど前に起きた石油危機の前後から、産業文明は終焉にむかい別の文明社会、たとえば脱工業化社会ポスト・インダストリアル・ソサエティと呼ばれるものに移行するであろう、という考えが出されています。しかし村上さんはそう考えない。産業文明がひとつの転機にあるのは確かですが、それは産業文明そのものの終焉を意味するものではなく、それを構成する、世紀を単位とするような段階（サブ・システム）の転換としてとらえることが

できるというのです。そしてそれぞれの文明の段階は、固有の技術的な枠組（村上さんはこれを「技術パラダイム」と名付けています）によって特徴づけられています。つまり段階の転換は「技術パラダイム」の変化によって説明されるのです。

具体的にみてみましょう。産業社会は産業革命によって成立しましたが、新しい文明をきり拓いたのは繊維関係の技術でした。これに続いて鉄道が十九世紀システムを成熟に導きます。産業社会の第二段階である二十世紀システムは自動車産業中心の技術によってきり拓かれ、自動車を含む数多くの耐久消費財を供給する技術がいっせいに推し進められて成熟のパラダイムが成立しました。

それでは二十一世紀システムをきり拓く突破のためのパラダイムは何でしょう。現状では在来の産業活動のオートメーション化であろうと考えられています。そしておそらくはマイクロ・エレクトロニクスに基づく技術パラダイムが、二十一世紀システムの成熟形態となるのでし

よう。情報化社会の成立です。しかし変化はまだ始まったばかりです。ましてや二十一世紀の技術パラダイムに支えられた社会がどのようなものであるのか、まったく見当がつきません。

つまり、基本的に、現在の経済的混乱のおおもととは産業文明の二十世紀システムから二十一世紀システムの転換にともなうもの、ということができるとは思います。

村上さんがこの本の中で訴えているのは、産業化こそ近代化の中軸をなす特性であり、「近代化の過程とは、前産業社会の伝統を清算しつつ唯一の普遍型に収束する過程ではなくて、産業化の最低限の要請と前産業社会の伝統とが、不断の相克とそして相互適応をくり返す過程である」（序章一五ページ）ということですから、すなわち近代化は国々の適合性のあり方に応じて多様な形をとりますのです。本書の第一部では戦後日本経済の形成を、第二部では戦後日本政治の変動をとりあげていますが、ともに戦後世界に共通な諸条件と日本固有の文化伝統との相互作用の結果として説明されています。そして二十

一世紀システムへの移行にあたって、村上さんが「新中間大衆」と名付けた、これまでの中流階級という概念ではつかむことのできない中流意識をもった大群こそが、今後の事態の動向を決定するというのです。

二十一世紀とはどんな時代なのでしょう。村上さんは、「新中間大衆社会」は二十一世紀システム高度消費に適合的な制度であるとは述べていますが、それがどう変化するかについて明らかにしていません。今年よく話題となったジョージ・オーウェルの『一九八四年』に描かれたような、非常に高度な管理社会となるのか、あるいは一昨年、科学技術庁の行った科学技術の将来予測調査にみられるような、バラ色の高度技術社会となるのでしょうか。

興味深い現象があります。先年私は「歴史人口学からみた生と死」と題する連載記事を本誌に一年間掲載する機会をいただきました。そのご、これをもとにして『日本二千年の人口史』（PHP研究所）という本を書いた

のですが、そこで過去一万年のあいだに日本人口は成長と停滞を繰り返しながら、四つの波を描いて増加してきたことを指摘しました。そこではまだはっきり述べませんでした。新しい文明の形成期は人口が持続的に成長する時代であり、文明の成熟期は人口成長の停滞期にあたっていたのです。縄文時代後期、平安・鎌倉時代、江戸時代後半（十八世紀）は人口停滞期でしたが、同時に日本的な伝統が形成され、しかもその中から次の文明を用意するような変化が湧きあがってきた成熟期でありました。

二十一世紀に日本人口が停滞するのはどうも確実なようです。過去の経験に照らすならば、それは産業文明の成熟を意味するのではないのでしょうか。そして当然それは、「日本的」になるでしょう。このことはまさに村上さんが書かれたようにハイテクノロジを日本の文化伝統と適合させるかということであるわけで、世界のどこにもお手本はない、私たち自らが四苦八苦して見つけなければならぬことを意味します。追いつき型ではな

い、自前の目標を見出さねばならないのです。

日本的な生き方の発見といっても、単なる伝統への回帰を意味しません。あくまでも利用可能な技術を前提として、私たちの文化的伝統に適合的な制度を作りあげることなのです。近頃、家族や教育をめぐって議論が沸騰しています。五十八年度の『国民生活白書』は本文二六〇ページの、実に七割を家族の現状分析にあてているほどです。三世代同居をすすめたり、戦後教育の否定があるからさまに論じられるようになっていますが、古きよき日本への復帰が果たして現在の問題を解決し、将来の生き方のモデルになりうると本気で考えているとしたら、大きな誤りというほかありません。

村上さんも、戦後日本経済の成功の秘密を解く鍵を、特殊日本的な文化的背景に求める立場には与みしません。「日本の経済」は近代化の初めから試みられたのではなしに、日本における産業化が二十世紀の組織された資本主義に適應する努力の結果として、一九二〇年代に出現したもののなのです。子供たちの未来についても、同

様のことが言えるにちがいません。

梅棹忠夫さんは、家事の機械化と外部化、出産数の減少は女性を家事労働から解放して職場への進出を促したと述べ、将来は、男女同質化社会になるだろうと予見しています。女性の社会化は女権拡張の結果ではなく、家事からの解放という技術の変化の結果でした。そんな時代に、家族や教育に対する伝統的な態度は通用するでしょうか。男女雇用均等法に見られるように、制度も現実を追って変化しつつあります。この夏休みに、あなたの二〇年後を描いてみてはいかががでしょうか。

(上智大学)